

九州方言の分類と位置：日本言語地図を利用して

稲川，順一
熊本女子大学助教授

<https://doi.org/10.15017/11897>

出版情報：語文研究. 73, pp.21-31, 1992-06-07. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



九州方言の分類と位置

—— 日本語地図を利用して ——

稲川 順 一

一、はじめに

方言の地理的分類の方法は、概ねいろいろな議論が出尽くしていると思われるが、筆者はこの小論で、日本語地図を利用して一つの新しい分類を九州方言を対象に行なってみたい。同時に九州方言と中国地方（山口県）、四国地方（愛媛県、高知県）との比較を行いその距離を計り、言語的にそれらとどういう関係にあるかを示して行きたい。

二、方法

まず九州から各県（福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿児島、宮崎、大分）の県庁所在地と福岡県はそれに北九州市小倉区の計八地点を選ぶ。次に中国地方からは九州に近い山口県山口市、同下関市、四国からは同じく九州に近い愛媛県松山市、高知県高知市の計十二地点を選ぶ。これらの地点で、ある言葉に対してどういいう方を

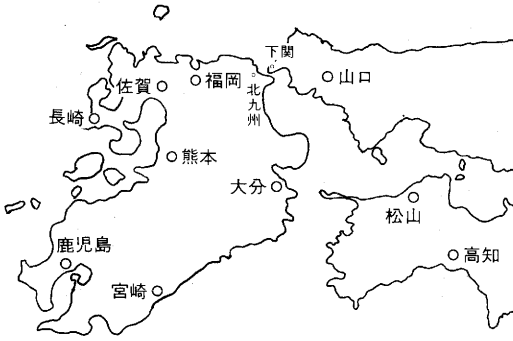
かを日本語地図から抜き出し、お互いの言い方を比較しその相対的の違いを点数化することを全項目にわたりおこなう（点数化の方法については後述）。その点数を総計するとある地点から見た時のほかのそれぞれの土地との言語学的距離が点数化される。これを十二地点すべてについて行くと、お互いの言語的な距離が見えて来るわけで、これによって、相対的な関係が数字化されて出て来るので、お互いの位置関係が明確に分かるわけである。

但し、この方法の現実的な欠点は日本語地図が、全ての項目に対して常に同一地点の報告が行われているわけではないということである。この場合、本稿では次善の方法として同じ市内の別地点で報告がある場合はそれを利用する、それがない場合は、その地点に最も近い地点での報告を利用する、という妥協的解決方法をとることにした。この解決方法は件数としてさほど多くなく全体的な結果を左右するほどの弱点にはならないと思われる。

次に規準とした各地点とその地点番号をあげる。

- A 山口市 6385.98
- B 下関市 7303.17

L	K	J	I	H	G	F	E	D	C
鹿児島市	宮崎市	大分市	熊本市	長崎市	佐賀市	福岡市	北九州市	高知市	松山市
8342.51	8325.56	7346.54	7372.27	7279.93	7341.42	7321.46	7303.75	7424.61	7401.60



また、この点数化による地域分類のもう一つの欠点は、今の日本語地図では文法項目が余り多くないので、ほとんど語彙面からの分析ならざるを得ない点である。

具体的に日本語地図で対象とした各項目が主眼としていた分野（音韻、文法、語彙）を分けてみると次のようになる。（後に注で述べるように項目によっては点数化から削除したものがあり、言語地図三百項目のうち、利用したのは二四四項目である）

- 文法 二五項目
- 音韻 一六項目
- 語彙 一二六項目
- 計 二六七項目

項目数が二四四と合致しないのは一つの項目が文法と語彙にわたる場合は二回数えたからである（例、形容詞「おおきい（大きい）」は「おおきい」というか「ふとい」というかの他に例えばカ語尾を使うかどうかという点、形容動詞「きれいだ」は「きれいだ」というか「うつくしい」「りっぱだ」というかの他に「きれいだ」というか「きれいじゃ」というかどうかの点など）。また、一語を二項目や三項目に分けてある場合もあり、数は合致しない。

また、語彙項目の中にも例えば「こまかい（細かい）」の場合、「こまい」というか「こめえ」というかの違いがあるなど、かなりの頻度で語彙と音声との両面からの考察が必要な場合もある（これは上記の二六七項目には含まれていない）。

次に、具体的な点数化の方法である。異なり度合に着目して十点満点で次のように点数化を行う。

音韻

表 I 二地点間の相違度の点数化及びその百分率

	山 口	下 関	松 山	高 知	北九州	福 岡	佐 賀	長 崎	熊 本	大 分	宮 崎	鹿児島
山 口		32.7 799	35.3 860	39.5 963	35.1 860	43.8 1,069	48.0 1,172	49.7 1,212	48.2 1,175	36.7 895	43.1 1,053	48.4 1,182
下 関	32.7 799		35.4 864	39.2 956	33.9 828	41.3 1,007	44.9 1,095	42.2 1,031	42.2 1,029	33.4 816	41.3 1,008	47.6 1,162
松 山	35.2 860	35.4 864		35.0 854	35.6 869	39.5 964	41.7 1,018	44.2 1,078	40.8 995	34.3 837	36.7 896	44.1 1,075
高 知	39.5 963	39.2 956	35.0 854		39.7 968	42.3 1,032	44.9 1,096	49.5 1,208	44.6 1,088	36.9 900	40.0 975	45.9 1,121
北九州	35.2 860	33.8 828	35.6 869	39.7 968		33.5 817	36.0 878	39.8 971	36.1 881	30.4 741	39.4 962	44.1 1,075
福 岡	43.8 1,069	41.3 1,007	39.5 964	42.3 1,032	33.5 817		32.4 791	38.9 949	32.5 792	35.6 869	44.7 1,090	45.2 1,103
佐 賀	48.0 1,172	44.9 1,095	41.7 1,018	44.9 1,096	35.9 878	32.4 791		30.4 741	31.9 779	41.5 1,013	42.5 1,037	44.1 1,075
長 崎	49.7 1,212	42.2 1,031	44.2 1,078	49.5 1,208	39.8 971	38.9 949	30.4 741		34.3 837	42.0 1,025	41.6 1,015	41.7 1,018
熊 本	48.2 1,175	42.4 1,029	40.8 995	44.6 1,088	36.1 881	32.5 792	31.9 779	34.3 837		36.0 878	37.5 915	40.2 980
大 分	36.7 895	33.4 816	34.3 837	36.9 900	30.4 741	35.6 869	41.5 1,013	42.0 1,025	36.0 878		31.9 779	40.2 980
宮 崎	43.1 1,053	41.3 1,008	36.7 896	40.0 975	39.4 962	44.7 1,090	42.5 1,037	41.6 1,015	37.5 915	31.9 779		36.5 890
鹿児島	48.4 1,182	47.6 1,162	44.1 1,075	45.9 1,121	44.1 1,075	45.2 1,103	44.1 1,075	41.7 1,018	40.2 980	40.2 980	36.5 890	

○点 発音が同じ場合

五点 似た様な発音であるが、音価が少し異なる場合

十点 発音が全く異なる場合

以上、この三つを基本にして後はそれぞれの程度に応じて点数化する。

語彙

○点 同じ形の場合

二点 語尾のみ違うもの

四点 同系統と思われるものの最低

同系統の語が複数ある場合の最低

六点 同系統と異系統の語が同時にある場合の最低

八点 異系統の語が二つあり、そのうちの一つの語尾のみ共通の場合

十点 異系統のもの

以上、この五つを基本にして後は類似の程度に応じて点数化する。

三、点数化による結果

以上のような方法で各地点間相互の相違度を点数化すると表Iのようになる。同じ枠内で上方に示している数字は、各点数を満点の二四四〇点で割ったもので左の地点との相違度の%である。

また、地図によりこれら各地点の直線の距離を調べて表にしたものが、注にあげた表IIである。

二地点間の相違度とその距離の関係を検討するために表Iと表II

を重ね合わせたものが、次の図1〜図12である。(棒グラフが相異度を示し、折れ線グラフは二地点間の距離を示す)

四、考察

これらの図を良く見て検討すると、言語的相違度と地理的距離の間になんらかの相関関係があることが判ると思われる。以下、これらの図に基づいて考察を進めよう。

図1、山口からみた場合。類似度の高い(相違度の低い)順に地名をあげると、下関、北九州、松山、大分、高知、宮崎、福岡、佐賀、熊本、鹿児島、長崎となる。下関、北九州の類似度が高いのは距離的に言って判るが、松山は距離の割には類似度が高い。これは間にあるのがかなりの部分海なのだが、ここでは実質的な距離よりも、言語的な距離の方が近いといえる。つまり、中国地方と四国地方の言語的距離の近さと言えるであろう。これは、山口からみての高知の場合にも言える。大分と福岡を較べると、距離はほとんど同じなのに、大分の方が言語的距離がずっと近いのは大分が言語圏として山口に近いところにあるのだろう。これは海上交通の頻繁さを物語るものか。宮崎と福岡を比較すると、宮崎の方が地理的距離のわりにずっと言語的に近いのは宮崎の方が非九州的なのである。あと福岡、佐賀、熊本、鹿児島、長崎は地理的距離の割に相違度が大きい。これはこれらの地方が山口から言語的に遠い、九州的な色彩を強く持っていることからくるのであろう。その中でも鹿児島は地理的な距離と言語的相違度が比例しているのは鹿児島言葉の独自性を物語るものか。

図2、下関からみた場合。類似度の高い順に地名をあげると、山口、大分、北九州、松山、高知、福岡、宮崎、熊本、長崎、佐賀、鹿児島となる。山口が占める位置はその地理的位置から言って首肯出来るが、大分はその地理的位置よりかなり言語的類似度が高く、北九州の地理的な近さと言語的な位置と較べると对象的で、大分と下関の言語的近似性が目だつ。山口からみた場合は北九州と大分は地理的位置と言語的位置が比例している点、下関からみた場合と違ふ。下関と大分の海上交通が盛んであったと言えるか。松山、高知は地理的距離より言語的距離の方がずっと近く、その言語圏の近似性を物語ることに、山口からみた場合と同様である。福岡はその地理的近さよりも言語的相違度が目だち、言語圏としての相違を物語ると思われる。宮崎は地理的位置と言語的相違度が比例している。あと熊本、長崎、佐賀は地理的位置に較べて、言語的距離が大きいことは福岡と同じでそこにそれらの言語的近似性を感じる。それに比して鹿児島は両者の関係がより比例的関係にあり、その独自性を感じさせる。

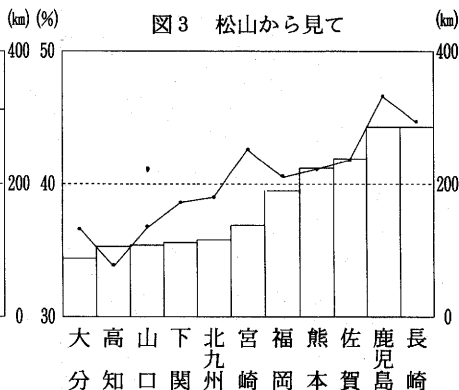
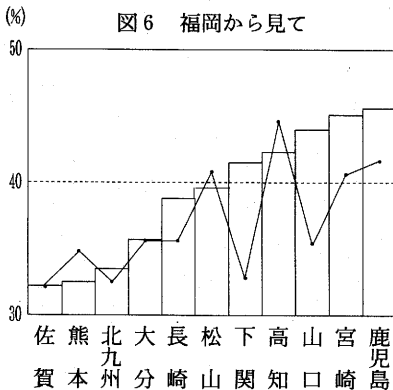
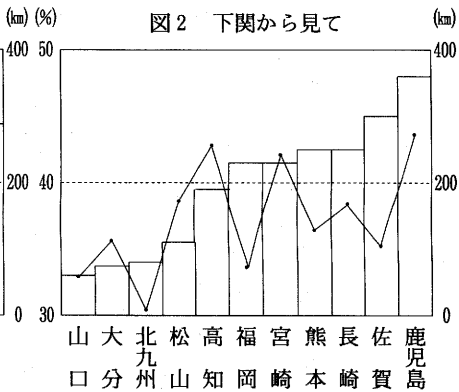
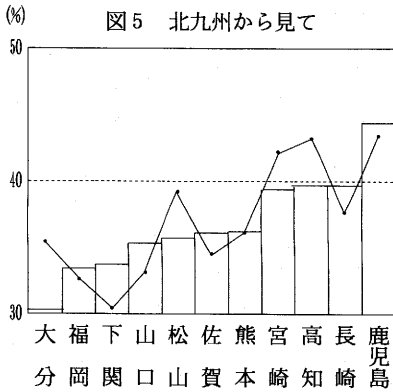
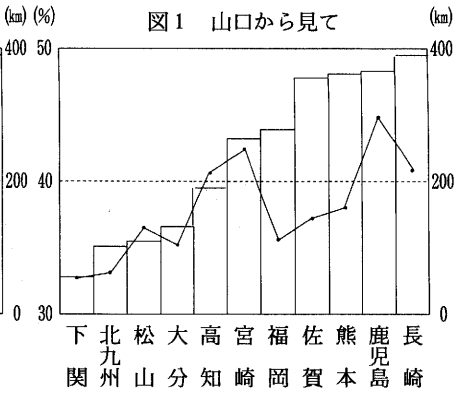
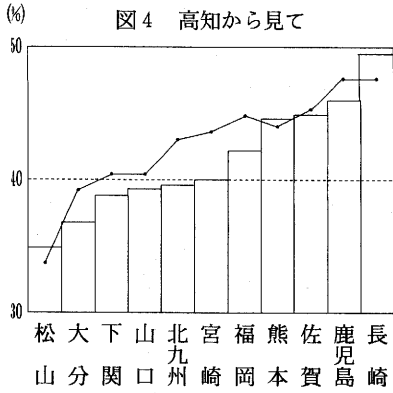
図3、松山からみた場合。類似度の高い順に地名をあげると、大分、高知、山口、下関、北九州、宮崎、福岡、熊本、佐賀、鹿児島、長崎となる。大分の言語的近似性が高知より随分高いのはその間に豊後水道という障害があることや従来の地理的分類を考えると一つの新しい発見と言えるのではないか。もっとも松山と高知の間にも四国山地という大きな障害があることを考えると、納得が行くのかも知れないが。山口、下関、北九州、宮崎が松山との間に海があるのにその地理的な距離より言語的近似性が大きいのはやはり言語圏としてのまとまりを感じさせる。福岡、熊本、佐賀、鹿児島、長崎

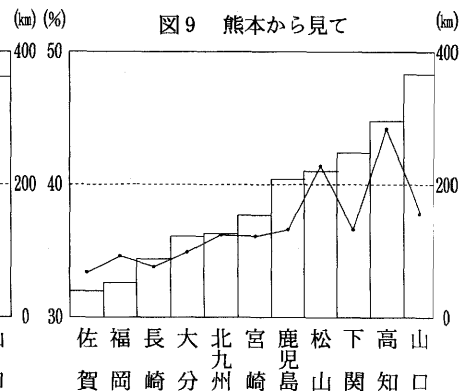
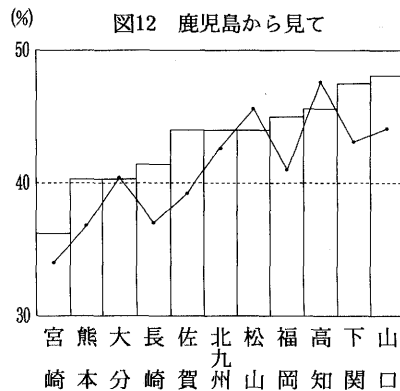
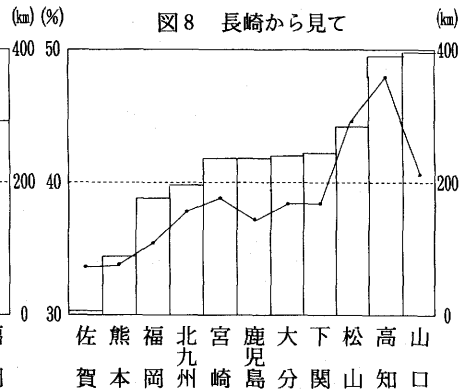
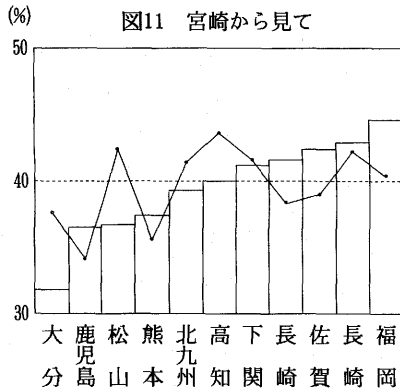
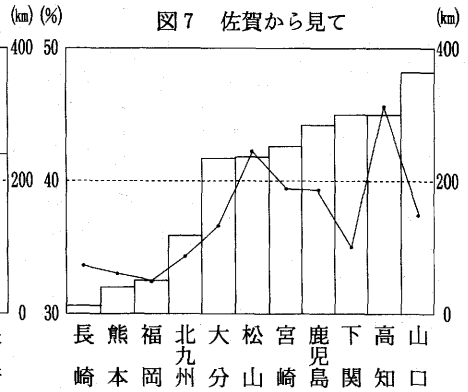
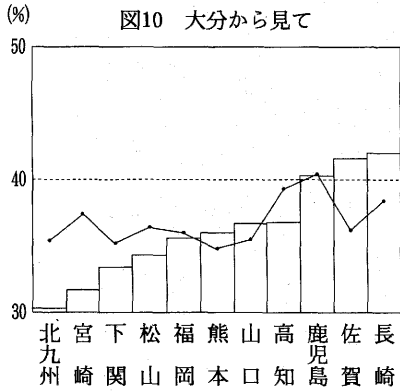
は地理的距離と言語的相違度が比例しているといえよう。

図4、高知からみた場合。類似度の高い順に地名をあげると、松山、大分、下関、山口、北九州、宮崎、福岡、熊本、佐賀、鹿児島、長崎となる。松山が言語的距離、地理的位置ともに最も近いのは納得できる。松山が近親性に富むのは当然としても大分、下関も高知を視点とした場合、その地理的距離の割に言語的類似性が高い。また、長崎が地理的にも言語的にも相違度が群を抜いて高い。前項の松山からみた場合、各地点の松山との言語的類似度が高いのに対して、高知からみた場合は各地点の言語的相違度が高いことが判り、二者を較べると松山の言語的開放性に対して相対的に高知の言語的閉鎖性が判る。もっともこれには地理的な距離が大きいことを考えると当然かとも思われる。

図5、北九州からみた場合。類似度の高い順に地名をあげると、大分、福岡、下関、山口、松山、佐賀、熊本、宮崎、高知、長崎、鹿児島となる。大分はその地理的な距離に比して言語的類似性の極めて著しいことが目立つ。この二地区は言語的類縁性が際立つといえよう。下関は地理的距離はきわめて近いのに言語的距離はその割には近くなく、関門海峡が間にあるのが影響しているといえよう。山口にも似たことが言えよう。松山、宮崎、高知は地理的距離の割に言語的類似性が高い。近親性に富むのは、群を抜いている大分以外に福岡、下関、山口、松山などであろう。佐賀、熊本も宮崎、高知、長崎、鹿児島に比してそれほど遠いとは言えない。鹿児島は地理的にも言語的にも遠い。全体的にみて各地区との言語的近似性の傾向が大きいといえよう。

図6、福岡からみた場合。類似度の高い順に地名をあげると佐賀、





熊本、北九州、大分、長崎、松山、下関、高知、山口、宮崎、鹿児島となる。佐賀、熊本はかなり類縁性が高いと言え、中でも熊本はその地理的距離の割に言語的に近い。あと、北九州、大分が言語的に近いと言えよう。長崎は地理的距離の割に言語的相違が大きい。下関、山口がその地理的距離に近い割に言語的相違がかなり遠いのはやはり同前、関門海峡の影響であろう。宮崎、鹿児島は地理的距離の割に言語的相違が大きく、松山、高知よりも類縁性が薄いと云えるのは面白い。

図7、佐賀からみた場合。類似度の高い順に地名をあげると、長崎、熊本、福岡、北九州、大分、松山、宮崎、鹿児島、下関、高知、山口となる。長崎の類似度はかなり高く、地理的距離に比してその言語的類縁性は非常に大きい。あと熊本、福岡もかなり近いといえる。大分、松山、宮崎、鹿児島、下関、高知、山口は相違度の方が大きい。北九州は類似グループと非類似グループの丁度中間にある。下関、山口がその地理的距離に比して言語的距離が大きいのは同前、関門海峡の影響であろう。大分は地理的距離の割に較べ言語的相違が大きく、九州の中でもグループを別にするとと思われる。宮崎、鹿児島も同じ事が言える。大分と松山の言語的相違度が似ている事は面白い。また、高知よりも山口の方が言語的距離が遠いのも面白い。全体的に見て比較的他の方言との相違度が高いのが判る。

図8、長崎からみた場合。類似度の高い順に地名をあげると、佐賀、熊本、福岡、北九州、宮崎、鹿児島、大分、下関、松山、高知、山口となる。佐賀との類似度が極めて高い事は図7に見たとおりである。熊本とは似ているといえようが、佐賀の類似度に較べるとそ

れ程ではない。あと、福岡、北九州、宮崎、鹿児島、大分、下関、松山、高知、山口はむしろ言語的距離は大きいと言え。九州以外の四地点は言語的距離の遠い位置にある。特に山口の場合、地理的距離に比して言語的相違度が高い。全体的に見て他の地点との言語的相違が目だち、比較的孤立型の方言と言えよう。

図9、熊本からみた場合。類似度の高い順に地名をあげると、佐賀、福岡、長崎、大分、北九州、宮崎、鹿児島、松山、下関、高知、山口となる。佐賀、福岡との近縁性が強く、共に地理的距離より言語的類似性の方が高い。長崎もかなり近いといえる。熊本からみた場合の特徴的なことは、全十二図のうち一番言語的距離と地理的距離との比例度合が規則的で例外が少ないことである。九州の中では鹿児島が幾らか地理的距離に比して言語的距離が遠い。これは鹿児島言葉の独自性によるものであろう。例外と言えば関門海峡のある下関と山口の二地点くらいで他の海を隔てている松山、高知共に一定の比例度合を保っている。熊本の場合、特立的なことは、従来言われている程閉鎖的な性格ではない点である。

図10、大分からみた場合。類似度の高い順に地名をあげると、北九州、宮崎、下関、松山、福岡、熊本、山口、高知、鹿児島、佐賀、長崎となる。北九州の言語的位置が群を抜いて近い。あと宮崎、下関、松山が類似性が高い。以上四者は地理的距離に較べて言語的位置に近い。大分の特徴は今問題にした他の地点との地理的距離が比較的等しいこととその地理的位置のせいもあってかどの方言とも言語的類似性がかなり高い点である。松山も同じように言語的類似性が高かったが、大分はそれよりも度合いが高く、言語的開放性がかなり高いといえよう。しかし、その中でも鹿児島、佐賀、長崎は

言語的相連度が大きく特に後二者は地理的距離に比して言語的距離が大きいのはその方言系統の違いを大きく感じる。高知が鹿児島、佐賀、長崎よりも言語的距離が小さいのは驚きである。下関、山口がさほど言語的位置が遠くないことは、前に述べたようにこれらの都市との交流が陸伝いよりも海を使って行われたと推測できる。

図11、宮崎からみた場合。類似度の高い順に地名をあげると、大分、鹿児島、松山、熊本、北九州、高知、下関、長崎、佐賀、山口、福岡となる。大分との言語的距離がきわめて近い。あとは鹿児島、松山、熊本が比較的言語的類似度が高い。特に松山、高知は地理的な距離の割合に言語的距離が近く、海上交通が頻繁だったことが考えられる。福岡との言語的距離が最も遠いのは意外である。しかし宮崎は全体的に見て大分を除いて他地区に対して言語的に閉鎖的である点が特徴的であると言えよう。

図12、鹿児島からみた場合。類似度の高い順に地名をあげると、宮崎、熊本、大分、長崎、佐賀、北九州、松山、福岡、高知、下関、山口となる。最も言語的に近い位置にあるのが宮崎で、それも他の図と較べるとさほど類似度が高いとは言えず、それ以外の地点と言え、明らかに相連度の方が高く、鹿児島の言葉が他の地方から如何に隔絶しているかを物語っている。

五、結論

以上、いろいろと検討を加えてきたが、結論としてまとめたい。今まで見てきたことでおのずと判るかと思われるが、きちんと何々方言区画というように別かれるわけではないということである。何

より、鹿児島島の孤立性ということにははっきりと判るのであるが、あとは、微妙に類似関係が入り組んでいる。ここで似ているか似ていないかの線をあえて引くとすれば、どうも36%の線が両者を分ける線になり、それ以上は似ていない、それ未満は似ていると言えようである。尤もこれはきわめて便宜的な線であり、何も絶対的なものではないこと言うまでもないが、その36%未満ということで整理してみると、次のようになる。

山口に近い所	下関	北九州	松山
下関に近い所	山口	大分	北九州
松山に近い所	大分	高知	山口
高知に近い所	松山		
北九州に近い所	大分	福岡	下関
福岡に近い所	佐賀	熊本	北九州
佐賀に近い所	長崎	熊本	福岡
長崎に近い所	佐賀	熊本	
熊本に近い所	佐賀	福岡	長崎
大分に近い所	北九州	宮崎	下関
宮崎に近い所	大分		松山
鹿児島に近い所	なし		福岡

これから言語圏を構想するとどうなるか。

まず北九州、大分、松山、下関、山口を一つのまとまりとする大きな言語圏が考えられる。宮崎はその中の大分に対してだけ窓を開いている。高知は松山と小分類を作る。次に長崎、佐賀、熊本を一旦まとまりとする大きな言語圏が考えられる。福岡は右記の二つの大きな言語圏の中間に位置する。鹿児島はさきに述べたように、独立

の言語圏を作っている。

従来九州方言とまとめて呼ばれてきていたが、アクセントを考慮に入れないでも必ずしもそのように単純には言えないことがわかったと考えられる。

結論は以上のようになるが、この論文は一つ一つの都市をもって各地区の代表としているので、それぞれの都市がその地区を言語的に完全に代表しているとは言い切れない点に難点が残るが、一つの見方としての価値はあるかと思われる。

注

以下、省略した図をあげる。

図18 おおきい(大きい) — オオキイ類の詳細図

図19 おおきい(大きい) — デカイ・イカイ類の詳細図

図23 ちいさい(小さい) — チイサイ類の詳細図

図120 ベロの意味 — 第116・117・118・119図の総合図

図128 くるぶし(踝)・・・これはN(無解答)が多かったので省いた

図135 「あぢ」「ほくろ」の総合図

図138 おんな(女) — 卑称・・・これは解答例が少なかったので省いた

図146 おてだまあそび(お手玉遊び)・・・抽出不能が多かったので省く

図150 かたぐるま(肩車) — 特殊な名称・・・解答例が少なく省く

図54 「いと」と「いど」との総合図

表II 2点間の距離 (単位km)

	山口	下関	松山	高知	北九州	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島
山口		51	131	209	62	111	144	210	162	105	249	296
下関	51		173	248	9	60	96	164	129	102	231	264
松山	131	173		78	180	219	239	294	222	128	248	324
高知	209	248	78		255	291	305	353	279	185	272	356
北九州	62	9	180	255		51	87	155	122	104	228	257
福岡	111	60	219	291	51		41	107	93	117	210	224
佐賀	144	96	239	305	87	41		68	63	122	183	186
長崎	210	164	294	353	155	107	68		77	168	171	143
熊本	162	129	222	279	122	93	63	77		96	119	135
大分	105	102	128	185	104	117	122	168	96		149	207
宮崎	249	231	248	272	228	210	183	171	119	149		89
鹿児島	296	264	324	356	257	224	186	143	135	207	89	

- 図157 はないと(機糸)・・・無解答が多く省く
 図166 こめびつ(米櫃)―特殊な名称・・・解答例少なく省く
 図170 はんまい(飯米)・・・「質問せず」と無解答が多く省く
 図173 「もみがら」と「ぬか」との総合図
 図175 じゃがいも(馬鈴薯)―特殊な名称・・・解答例少なく省く
 図178 さといも(里芋)―その2・・・解答例少なく省く
 図184 「とうもろこし」と「とうがらし」との総合図
 図200 ハヤシ・ヤマの意味・・・数字化しにくく省く
 図202 おうま(牡馬)・・・「調査していない」が多く省く
 図203 めうま(牝馬)・・・「調査していない」が多く省く
 図204 こうま(子馬)・・・「調査していない」が多く省く
 図216 さかな(魚)・・・点数化しにくく省く
 図219、220 ひきがえる・・・該当地区に無解答あり省く
 図221、222、223 おたまじゃくし・・・点数化しにくく省く
 図225 かなへび(金蛇)・・・省く
 図227 へび(蛇)―へび類の音声詳細図・・・該当地区に無解答多く省く
 図230 かまきり(蟷螂)―特殊な名称・・・無解答多く省く
 図243 すぎな(杉菜)・・・無解答多く省く
 図246 コケの意味―図105、131、217、245の総合図・・・点数化しにくく省く
 図257 敬称語尾(さん・さまなど)―図251、252、256の総合図・・・点数化しにくく省く
 図269 におい(悪臭)・・・無解答地区があり省く
 図286 やのあさって(明明後日)・・・無解答地区多く省く
 図289 「おおきい」と「ふとい」と「あらい」との総合図・・・点数化しにくく省く
 図290 「ちいさい」と「ほそい」と「こまかい」との総合図
 図295 かつぐ(担ぐ)―図66、67、68の総合図
 図297 カドの意味・・・点数化しにくく省く
 図298、299 ほうほう(ふくろうの鳴き声)・・・点数化しにくく省く
 図300 ちゅんちゅん(雀の鳴き声)・・・点数化しにくく省く